

# 巻 頭 言

丸山 英二（神戸大学）

「北海道生命倫理研究」第5号を上梓する。巻頭論文「地域医療制度と幸福度指標」では、北陸地方で長年、医学部における教育研究に携わってきた筆者が、地域社会に固有のQOLについての思索を展開している。とくに18世紀ドイツの思想家ヘルダーの唱えた幸福感と風土との結びつきに注目し、風土に根ざした地域医療のあり方を考察する。次の医学概論担当者の手になる「医学教育における教養教育の意義を考える」では、医学教育モデル・コア・カリキュラムの変遷の中、いま改めて「医学とは何か」「よりよい医師とはどのような医師か」という基本的な問いに立ち返ることの重要性が主張され、この問いを探求する学問としての医学の哲学、すなわち医学概論のあり方が考察されている。続いて、「エリアーデの戦時体験と苦難の正当化」では、20世紀中期を代表する宗教学者ミルチャ・エリアーデにおける、不幸や災害、苦難の精神的、宗教的意味が描出されている。

北海道生命倫理研究会は毎年2回セミナーを開催している。2016年度夏季には、三つの講演と二つの研究報告がなされた。講演は「医学教育における教養教育の意義」「医療安全の現状と課題」「死生論」を扱ったものであった。本号では、医学教育と医療安全に関する講演を踏まえた論稿及び報告を収録した。研究報告では、医療安全に関連した、採血・注射による神経損傷に対する医療側の責任の問題、及び本研究会で継続的に扱われている独居高齢者問題が取り上げられた。冬季は、二つの講演と四つの研究報告がなされた。一つ目の講演は、エリアーデが、死の意味を既存の言葉に置き換えずに、それと向き合おうとした思索を跡づけたものであった。研究報告では、独居高齢者問題に関して、昨年からの札幌、釧路、留萌で行っているインタビュー調査の現状及び課題が取り上げられた。二つ目の講演は「自死遺族支援」に関するもので、自死遺族支援のための会運営の意義と困難に関する有意義な示唆を得ることができた。以上のうち、本号では、エリアーデの思索に関する講演と、独居高齢者調査の現状と課題についての報告の一つを収録した。

本誌では「学会レポート」を掲載しているが、本号では、専門家による報告に加え、日本生命倫理学会年次大会、人体科学大会に参加した、保健医療学部大学院生、医学部生による報告も収録した。将来、医療・看護・福祉の現場に立つ学生が、専門家の発表を聞くことで、自らの将来の職業像を描くことができると期待される。

本研究会は時代の先端の動きに敏感に反応し、研究の成果を徐々に生み出しつつある。同時に、時代のうねりの中で軸となるような考え方を提示する役割も重要である。この点は今後の課題であろう。また、北海道という地域性の中から生み出される地域医療のあり方へのさらなる思索と、閉塞性を打破した、全国の研究者、研究会との交流が望まれるところである。本誌を手にした皆さまには、是非とも北海道での生命倫理研究、及び本研究会との交流に関心を向けていただきたいと思います。

2017年3月